

A Study of Joseph Conrad

“The Secret Agent”

1972

Toshihiko Ueki

Preface

Nostromo, *Under Western Eyes* と Conrad の代表作と目されている政治小説を扱ってきたからには、どうしてももう一つ *The Secret Agent* を見逃すことは出来ない。*The Secret Agent* は他の二つの作品と比較した場合、スケールと躍動感においては他の二つに劣ってはいるが、他の作品には見られぬ grotesque な comical 性を備えた作品であり、revolutionist の姿に焦点をあてた Conrad の revolutionist に対する見解を知るうえでは絶好の作品であると思われる。これら revolutionist 達の言動を中心に描かれる symbolic な世界を媒介として現実の世界を考察してみたい。

I

Cannibalism

The Secret Agent の舞台となっているロンドン是世界でも最も大きな街の一つであり、伝統と文化によって支えられた街である。石とレンガから造り上げられたその整全とした街路、建物は人間文明の最高の華である。そこに住む人々もロンドンという都市と同じく全ての面に渡って整全とした組織の中に生きているのである。国家という最大の共同体の中にロンドンという共同体があり、ロンドンという共同体の中に役所、会社、そして共同体を構成する一番小さな単位である家庭が含まれているのである。一見、これは長い年月をかけて人間が造り上げた素晴らしい組織体と思えるが、そうしたのも一皮剥けば原始の世界に等しいとも思える混沌とした無秩序な世界でしかないのである。それ故に人々はこの外面的には整全とし、内面的には混沌とした世界の中で生きていくために何らかの共同体の構成員になることによって生計を立て、その身の安全を計っているのである。例えば、Assistant Commissioner や Chief Inspector Heat は国家共同体の安全を守る共同体に属し、その職務を武器として、Karl Yundt や Michaelis, Ossipon そして Professor は過激な理論や行動を主張する共同体に属し、その行動や理論を生み出す弁舌や爆発物を武器として身の安全を計り、Verloc は家庭という共同体に身を隠し、革命家達の情報を警察に売るのを武器として身の安全を守っているのであり、Winnie も、生活能力のない弟の Stevie と体の不自由な母親の安全を考えて、金を持っている Verloc と結婚し、身を守る安全な場所を家庭に見出しているのである。このように考察してみると、人間の安全は動物がその身を守るように一方ではある集団に属し身を守ると同時に他方では攻撃してくるものに対して常に威嚇攻撃

し、場合によっては激しい攻撃を加えるという二つの能力の相互作用の上になりたっているのである。従って人間はこの二つの能力——攻撃と防禦——を有していなければ、人間は Professor がいうような強者が弱者を餌食にして生きている世界では生きていけないのである。

社会的生活を営みうる能力を持つ一般の人々はこの弱肉強食の世界でも弱いものは弱いものになりになんとかうまく生きていく力を有しているのであるが、Stevie のように知的能力において他の人々に劣っていると考えられる人間は他の人々のように身を隠す術も知らなければ、又相手を威嚇したり攻撃する能力も持っていないのである。従って弱肉強食のこの世界では、彼は常に強者の餌食となる運命を背負わされているのであり、彼の身の安全は姉の Winnie の手でなんとか守られているのである。彼はロンドンという jungle の中に生きている最も弱い動物なのであるが、最も弱い動物は常に敵より身を隠さなくてはならないし、又、最もよく狙われる存在でもある。従って彼が置かれている環境に対して最も敏感であるのは弱い動物の本能からして当然のことなのである。瘠細り鞭打れて馬車を引く馬を見た時の馬に対する Stevie の異常なまでの恐怖感を秘めた哀れみは馬が可哀そうだとか動物愛護といった安っぽいセンチメンタリズムではなく、人間の残忍な力に対して攻撃することも防禦することも知らぬ馬と同じ存在である己に迫ってくる危機として Stevie はその情景をとらえているのである。この危機感には相手に対して攻撃すべき手段を持たぬ最も弱いものだけが感知しうるものであり、身を隠すと同時に攻撃能力をも備えているものには Stevie ほど強烈にその危機感を感知しうるものではない。従って一体誰が Verloc の仲間である Karl Yundt や Professor の恐ろしい会話を聞いた Stevie が落着きを失い異常なまでに興奮するのを見て、又、馬車馬の件での Stevie の異常な行動を見て Stevie は気が狂れているといえようか？ 彼は知的能力において常人に劣ってはいようが、感性においては決して劣っているとは思えないのである。否、Conrad は *The Secret Agent* の中で一度として Stevie が mad だとはしていないのである。それどころか 'For Stevie was not mad!' 'he was reasonable' と Stevie の精神的な正常さを強調しているのである。Stevie の異常さは余りにも純粋な感性の反応結果なのであり、この弱肉強食という残忍な世界の一面を正しく認識している証拠なのである。

しかしたとえ攻撃と防禦の手段を有している者であってもやはりこの世界では決して安全であるとは断言出来ないのである。そこにはより強いものが相手を犠牲（餌食）にして生きているという原始的な真実が罷通っているのである。例えば、Mr. Vladimir から自国の革命運動を弾圧するために革命家達の本拠となっているロンドンで爆破事件を起こし、英国警察の革命家に対する取締りを強化させるような計画を実行するように命令された時、Verloc にとって命令を拒むことは収入の道を断たれることであり、命令を実行することは自分の身を危険に晒すことなのである。Mr. Vladimir は Verloc を犠牲（餌食）にして自国の安全を計ろうとするものであり、一方、Verloc は Stevie を犠牲にして爆破計画を実行に移すのである。更に Ossipon は Winnie を犠牲にして金を手に入れるといった具合に、*The Secret Agent* の弱肉強食の jungle の image は小説の筋が進展するに従って次第に深く、大きく小説の世界を覆っていくのである。しかもこの jungle

の image は対外的な関係においてのみならず、愛情によって結ばれていると思われている家庭生活の中にも存在しているのである。Winnie の Verloc との結婚は愛情がその基盤となっているのではなく、母親と弟の Stevie の安全がその基盤となっていることは前述したとおりであるが、この弱肉強食の世界において彼等三人の安全を保障してくれる人物が Verloc であった。そして Winnie は、Verloc との七年間の結婚生活の間、外の世界とは断絶しているような裏通りにある巣窟（家庭）でぬくぬくと安住を貪って生きてきたのである。彼女は Verloc が彼等の安全を保障してくれることを信じて疑わなかったのである。その信頼していた守護神とも云える Verloc が彼女が母親のような愛情をもって愛していた Stevie の生命を奪ったことが判明した瞬間から、Verloc は彼女の心の中では彼女にも安全を保障してくれる人物ではなくなったのである。否、むしろ彼女の生命の安全を脅かす存在となって彼女の目に映っているのである。従って Stevie の悲惨な死を知ってから後の Verloc に対する Winnie の反応と行動は Stevie の死に対する復讐の反応であり行動であるというよりはむしろ強敵に睨まれた餌食となる弱い動物の強敵に対する自己防衛の反応であると考えられる。もはや誰からも安全を保障されない Winnie は強敵 Verloc の心の透を狙って敵を襲い生命の安全を計ったのであるが、彼女を守ってくれる者もいなければ彼女の属する集団もない無知の世界に彷徨い出た彼女が女性を食いものにする恐ろしい敵 Ossipon の牙にかかってその生命を失うことはこの jungle の世界では自然の道理であった。

更に jungle の image は *The Secret Agent* の中で使用されている rabbit, dog, cat, wolfish, cannibal, snake, decoy, stall, trap, horse, hunt, brute, goatee, murderer, swine, escape, kill, blood, shelter, knife, butcher, meat, locusts, ants, whale, extermination, dogfish, animal, butchery 等々の単語の相互関連及び反復によって増大され、Karl Yundt や Professor の語る

Do you know how I would call the nature of the present economic conditions? I would call it cannibalistic. That's what it is! They are nourishing their greed on the quivering flesh and the warm blood of the people—nothing else.” (1)

Do you understand, Ossipon? The source of all evil! They are our sinister masters — the weak, the flabby, the silly, the cowardly, the faint of heart, and the slavish of mind. They have power. They are the multitude. Theirs is the kingdom of the earth. Exterminate, exterminate! That is the only way of progress. It is! Follow me, Ossipon. First the great multitude of the weak must go, then the only relatively strong. You see? First the blind, then the deaf and the dumb, then the halt and the lame — and so on. Every taint, every vice, every prejudice, every convention must meet its doom.” (2)

といった語調からも jungle の image は沸上がってくるのである。

このような一定の規則も倫理観も道徳観も存在しない混沌とした人間世界の秘めたる jungle の image は背を丸め無心に書きなぐる Stevie の無数の交差し重複している円によって象徴されているのである。Stevie の描く無数の無秩序な円と等しい混沌とした人間世界においては強いものが弱いものを襲い、その犠牲にするのであるが、その世界では将来などは決して予測出来ない

ものであり、強いもの——強い力——が勝つのであって、強いものが必ずしも正義ではない。強いものの側にあるのは力であって、「力」は絶対に真理と並存するものではなく「力」のあるところには我意を通そうとする作為がある。「力」を有したものが弱いものを襲わないのはその両者の間にある関係は相手が自分にとって有役である間だけ継続する関係であって、それは単なる利害関係でしかないのである。従ってこの利害関係が破れた時、強いものは必ず弱いものに襲いかかるのである。

それではこの世界で生き残っていけるものは強いものだけであるかといえばそうではない。弱いものは強いものの餌食になると語る Professor はこの野蛮な世界の一面を正しく認識してはいるが、必ずしも強いものが永遠に生き残るものではないということを彼は知らなくてはならない。Professor は懐中に忍ばせている爆発物の力によって、彼はその強さを得ているのであるが、所詮その強さは滅びる側にある強さであって、増殖していく側にある強さではない。彼が最も恐れる大衆とは弱く、犠牲を強いられる存在ではあるが、彼等には強い増殖する力が与えられているのである。jungle における虎は小さな弱い動物にとっては恐怖であるが、虎の増殖力は非常に弱く、逆に小さな弱い動物はどれ程虎の犠牲になろうとも増殖力は非常に強いのである。換言すれば、強いものには永遠の未来というものはなく常に滅び去る可能性があり、反対に弱いものにはどれ程犠牲を強いられようとも生き残る永遠の未来が待っているのである。従って Professor が即発性の完全な爆発物の製造に時間を是非とも必要としていることは単に爆発物の研究、開発、そして製造のための時間を必要としているだけでなく、その目的を貫徹するまでの自らの滅びようとする生命の時間を是非とも引延ばす必要があるからなのである。Ossipon はこのことを Professor に指摘しているのである。

But eternity is a dammed hole. It's time that you need. You —— if you met a man who could give you for certain ten years of time, you would call him your master. (3)

The Secret Agent の jungle の世界では前述したように個々の生きものは孤立し、単独に生きているのではない。Professor は爆発物に、Verloc は Embassy に、Winnie, Stevie そして母親は Verloc に、Karl Yundt はかつての捨てた女性に、Michaelis はその Patroness に、Ossipon は金を持っている女性に、Chief Inspector Heat は Verloc の情報にと総てのものが他のものに依存して生きているのであるが、*The Secret Agent* の世界における依存の仕方はどう見ても不自然であり、そのような不自然な世界において他のものに依存することは自らの安全あるいは仕事の能率をある程度高めることは出来るが、反面、他のものによる自己世界の破滅、又、相手に犠牲を強いる要因をも多分に含んでいるのである。従ってこの歪んだ jungle の世界では相手を充分に理解せず、自分以外のものに頼って生きようとする事自体が間違っているものであり、それは期せずして敗北を意味するものである。

我々、弱く貧しい人間は無限なまでに巨大で残酷な世界の中に投げ込まれているわけである

が、時間と世界の永遠の動きの中には掬もなければ、裁き手もないことを熟知しなくてはならない。それ故にこの世界において未来を予測したり、未来に期待することは全く馬鹿げたことであり、我々弱い人間はこの *The Secret Agent* のような歪んだ世界では自分自身及び自分の衰れた理性に全面的に頼る以外、生きていく方法はないのである。

II

Fragmentation (1)

科学の世界では総てのものを形成している最小単位は原子である。同じように人間社会を形成している最小単位は人間という原子である。科学の世界では原子は一定の法則に基づいて作用し合うのであるが、人間世界を形成する原子は科学的な法則に基づいて作用し合うものではなく、個々の原子の主観的变化に基づいて作用し合うのである。*The Secret Agent* の世界はまさしくこの世界であって、そこでは原子は全体的な組織に対して一定の法則に従って反応し合うのではなく、全く出鱈目に身勝手な反応をし合っているのである。それにもかかわらず、その世界を構成している人間はその世界に一定の法則や基準が存在しているかのように錯覚したり、一定の法則や基準を付与しようとするのである。Chief Inspector Heat が彼の前の部所であった泥濘を相手にする仕事を懐しむのも泥濘と警察との間に一定の法則 (rule) があつたと考えるからであり、Sir Ethelred が Greenwich での爆破事件についての最も重要である事件の細部には耳も傾けず “Be lucid, please” と Assistant Commissioner に語るのも複雑な事件を簡潔な筋道の通った形に収めてしまおうとする態度の現われである。更に Mrs. Verloc が Verloc との結婚の結果である家庭生活に安定を見出し、Stevie や母親の生活の保障を得ようとすることも、母親の almshouse 行もすべて将来を予測しての道理に叶った行動であると思われるが、Conrad は人間世界におけるこれらの予測や法則といったものは個々人が生み出す個人的観念でしかなく、全く頼りにならないことを繰り返し我々に語りかけてくるのである。Stevie の偶然による爆死を始めとして、絶対に爆破事件の黒幕が警察に判明することがないと信じていた Mr. Vladimir に警察の捜査の手が伸びてきたことに対する Mr. Vladimir の驚きを、Ossipon の推測の完全な誤りを、Verloc の妻に対する誤解を、……といった具合に次々と我々の前に当事者達が予想だにしない方向に事が展開していくことを明らかにし、最後に Conrad は総ての人々が絶対的に信頼し、それに合わせて毎日の日々を送っている時間と空間の基準となっている Greenwich 天文台の爆破を我々の目の前に晒すのである。我々はこのような出来事を通して、この人間世界は実は一様性のない世界であり、秩序とか首尾一貫性とか法則といったようなものは我々の心の中にしか存在しないものであって、我々の外の世界は絶対的な混沌とした世界であり、我々は現実に対して如何なる判断も下しえないし、又、下しえるものではないことを痛感するのである。同時にこの人間世界を動かしていると思われる人間の行動は実は人間世界のためになされているのではなく、個人のためになされているのであることを感知するのである。例えば、Chief Inspector Heat は Verloc と Greenwich 天文台爆破事件とはどこかで繋がっていると臆測しながらも Verloc から有効な情報

を将来も得ようとして Michaelis を犯人に仕立てあげようとするのであり、Assistant Commissioner は、妻と Michaelis の Patroness との関係から、Michaelis を逮捕することが自分の立場を思わしくないものとする個人的憂慮から犯人の追求に乗り出すのである。罪のない弱い人々を守り、正義を慣行することが職務の警察の幹部のこうした行為は我々に彼等が事件を公平な客観的立場から解決しようとするのではなく、個人的な立場に立って処理しようとしていることを証明しているのであり、この外観的には整全とした世界の内面の歪んだ一面を覗かせているのである。それ故に Winnie の言葉

“Don't you know what the Police are for, Stevie? They are there so that them as having nothing shouldn't take anything away from them who have.” (4)

は非常に ironical に響いてくるのである。加えて、Mr. Vladimir の Greenwich 天文台爆破計画は自国の安全のみを考え、友交国、英国の国内事情に対する如何なる理解も配慮も示していない行為なのである。このように分析していくと、*The Secret Agent* に登場する人物は Stevie を除けば、ほとんどすべての人物が実につまらぬ個人的動機に基づいて行動しているのである。

このようなつまらない個人的動機に基づいて行動してきた *The Secret Agent* の登場人物が Greenwich 天文台爆破事件以前に保っていた安定は一体何によって得られているのであろうか？

一つにはこの小説の題名によって象徴される secret であると考えられる。社会を構成している最小分子ともいえる家庭内においてすら家庭を構成する個々人がその secret を有した原子として存在しているのである。そのような原子の結合である家庭や Group (Police, Embassy, etc.,) が集合して社会を構成していることを考えるならば、社会は“secret”という多数の支柱の上に築かれているのである。しかも secret を有した個々人は社会を構成する他のものと相互理解や信頼といった絆によって結ばれているのではなく、利害関係の上になりたつ個人的観念によって結びついているのであり、行動しているのであるから利害関係が破綻をきたした時には個人的関係も破綻をきたすことは自明の理である。従ってこのような個人的観念に基づく行動こそ真の社会的協力関係を破り、社会の分裂を生み出す最大の原因なのである。秘密を有した個人及び Group を一つの共同体に結びつけているものは細糸のように弱い個人的観念でしかないのである。個人的観念は自己の secret world と他者の secret world との間の一本の偶然に結びつけられた糸のように両者を結びつけてはいるが、その間には理解も信頼も存在しないのだから、糸の両端にある世界は何時その糸が切れるかわからない不安定な状態の中で不安定な安定を保っているのである。このような不安定な状態から成り立っている社会の原子は互いに相手の存在を認識しながら相手の secret world を知らずにいるのだから、何処かで一本の糸が切れた時、その影響は思わぬ所まで広がっていくのである。しかもこうした状態が生まれてくるのは個々の原子及び分子がそれ自体がより大きな組織体を形成している一部分であることを認識せず、それ自体の観念によって組織体全体を、更に他の部分を判断・解釈しようとする客観的な広い省察に欠けているからなのである。それ故に secret を有した客観的省察に欠ける人間に支えられている社会が安定を得ていること自体が不思議なのである。従ってそのような社会がなんらかの変動をきたすことは時間の問題

であり必然的ともいえるのであるが、社会を構成する原子及び分子はあたかもこの世界には一定の法則や基準が存在するかの如くその安定を信じて疑わぬものであり、なんらかの偶然性によってその基礎が揺り動かされることなどは夢想だにしないのである。いわば我々の生活しているこの世界は大海を航行する小舟のようなものであるが、船の場合であれば、Conradの初期の作品に見られる如く乗組員全体の相互信頼と協力、勇気と努力、更に責任感などによって時化を乗切ることにも出来るのであるが、社会は余りにも巨大で複雑であり、社会意識や相互信頼に目覚めぬ多数の人間を有しているために完全な協力などはありえないし、更に時化の海ほどの生命に対する危機感も持ちえないので、個々人の行動は個人的動機に基づくようになり社会の破滅をより一層助長しているのである。The *Secret Agent* 号にはこのような他者を理解しようとする努力に欠け、個人的動機に基づいて行動する乗組員が余りにも多く乗っているのである。その典型を Winnie の人生観； things do not stand much looking into； Put her trust in face values； Winnie's philosophy consisted in not taking notice of the inside of fact； に見るものであり、Ossipon, Karl Yundt 及び Professor も又しかりである。

The *Secret Agent* の人物は相互に理解し合うこともなく、矛盾しながら、同時に自己流儀な見方に従って世界を解釈し、複雑怪奇な世界の動きを一つの理念に収めてしまおうとするものであり、自らの観念世界を真実在 < reality of truth > の世界を無視して造り上げ、現実世界との完全な分裂状態に置かれているのである。

第二に以上のようにして造り上げられた観念世界は固定されることによって有限性を付与されるのである。有限性を付与されることによって人間世界は限界をもつようになる。従って人間世界の中に構成されている諸々の事柄の有限性——造られしものの虚無——がこの人間世界の全てに充満しているのである。それはとりもなおさず時間の中に包含されることを意味しているのである。このように考えるならば、我々の有限界を支配しているものは time であり、皮肉にもこの time のみが有限性と無限性の両方を具備しているのである。The *Secret Agent* がこの time とどれ程密接な関係にあるかは R. W. Stallman の *The Art of Joseph Conrad*⁵⁾、及び Avrom Fleshman の *Conrad Politics*⁶⁾ に詳しく云求されているところであるが、Conrad は意識的に“left”という時計の進向方向である単語を繰り返し使用し、更に Stevie の花火事件は後の爆破事件との、Verloc が以前に女性に裏切られたことは Mrs. Verloc による Verloc の殺害との関連性を示唆するものであり、このような time の輪転を Stevie の無数の円によって暗示しているのである。Conrad においては time は未来に向かって流れるものではなく、ただ無限に輪転しているに過ぎないのである。この Conrad の time に対する見解を我々は *Heart of Darkness* においても見てきたのであるが、今一度 *The Secret Agent* においても見るのである。

全世界の時間と空間は Greenwich 天文台を基準にして規定されるのであり、その規定に基づいて人間は行動してきたのであり、行動し、行動していこう。従って Greenwich 天文台の爆破計画は人間が築き上げてきた人間の歴史の基準を破壊することを意味しているのである。Conrad はこの事件を通して人間の歴史的時間の推移を否定し、我々が見落しがちである暗黒の過去と現

在更に未来との時間的同時性を我々に示そうとしたものであり、我々が信じているような歴史的発展を伴った安定した世界などは存在するものではなく、現在も太古も未来も同じく無秩序で予測出来ない世界であり、同じ一点に同時に存在している世界であることを語りかけてくるのである。従って分裂した個々人の結合から出来上っている有限であやふやな世界に完全な崩壊をもたらすものが time であるとき、*The Secret Agent* という題名は time と同一視されるほどの非常に深い意味をもって再び我々の脳裡に浮かび上ってくるのである。

Fragmentation (2)

社会から疎外された Professor, Karl Yundt, Ossipon 及び Michaelis 達の自称 revolutionist はいかに社会から疎外されていようとも社会の中で生きている限り、自己の存在の精神的根拠となるべき社会的価値をもたなくてはならない、Professor が爆発物を所持していることはそれによって社会の安全を守っている警察に彼に対する警戒心を抱かせ、その結果として反社会性を帯びそれを基盤として生きているのであり、Karl Yundt はその過激なテロリズム理論によって警察及び revolutionist にその名を知らしめ、その虚栄に生きているのである、Michaelis も彼の 15 年におよぶ監獄生活の体験から、他人の言動に耳を傾けるわけでもなく、彼の話しを途中で遮られることに対しては大変な動揺を示すといったまるで監獄の壁に向って唯一人で話しているような様子で人間の未来についての optimistic な幻想に固執していながら、自分は真の革命運動の殉教者であると考え、又他の人々からも考えられているのである、Ossipon にいたっては女性を食いものにする以外能のない人間でありながら、彼とは全く異質の革命家の pose の下に生きているのである、そして Verloc は仲間を裏切り、家族を裏切り、警察を裏切り、社会を裏切っておきながら自分自身では社会を擁護し、人民の安全を守っていると自負しているのである、このような彼等に共通している点は人生に真正面から取組もうとする態度ではなく、汗して骨折って働くことを好まず、現実から遊離し、狭量で歪曲した考えに精神的満足を求めようとする meanness と vanity がある、彼等の理論は真に現実世界を認識したうえで形成されたものではなく、現体制において彼等が認められなかったことに対する個人的反感と怠惰がその形成主要因となっているのである、従って彼等の理論がどうあれ彼等は決して革命家と呼ばれる人物ではなく、現実を踏まえぬ狭量な空論をぶっている実行力のない夢想家でしかないのである、しかし現実をしっかりと認識していないのは彼等だけではなく、社会において高い地位にある Michaelis の Patroness や政治的には保守的とも思われる Mr. Vladimir にも見うけられるのである。

But what is one to say to an act of destructive ferocity so absurd as to be incomp-
rehensible, inexplicable, almost unthinkable; in fact, mad? Madness alone is truly
terrifying, inasmuch as you cannot placate if either by threats, persuasion, or bribes. (7)

Mr. Vladimir のこの言葉は、まさに現実世界の状況を全く無想した anarchy であり mad な考え方である、Mr. Vladimir の思考には真の政治性、未来性はなく、単にその場凌ぎといった

突発的な思考である。このような人間が政治を司る要職に付いていることを思えば、我々には安全な未来など期待出来るものではなく、何時どのような事態が発生するか全く予期出来ないのである。そして過去の人間の歴史もやはりこうした人間の突発的な政治的判断によって左右されてきたのであった。

更に悪いことには Mr. Vladimir のような人間が国際的には外交関係のある英国の国内事情を無視した独善的な考え方によってその交友関係に良からぬ影響を与えるばかりか、Milan の国際会議にも影響を与え、自国にとって都合な結果を導き出そうとするものである。そのような作為的な行動が国際間の相互不信、分裂という重大な政治的結果を生み出すものであり、加えて Chief Inspector Heat のような愚鈍な人間が内部から共同体構成員の間の不信と分裂を生み出しているのである。このような愚鈍な人間や独善的な人間の行為が内外から世界を分裂に導くものであり、ひいてはより不幸な人類の悲劇を生み出していったことは歴史が何よりも明白に証明しているのである。しかも人間の観念に源を發し流動しだした歴史は必ずしも人間の観念に沿って流動していくものではない。

History is made by men, but they do not make it in their hands. The ideas that are born in their consciousness play an insignificant part in the march of events. History is dominated and determined by the tool and the production — by the force of economic conditions. Capitalism has made socialism, and the laws made by the capitalism for the protection of property are responsible for anarchism. No one can tell what form the social organization may take in the future. (8)

歴史は一旦流動し始めるとそれ自体の生命と活動力を有し、人間の観念とは関係なく独自の運動を起すのである。その源となった destructive であり anarchy な観念から流動しだした有機的な発展を伴わない歴史には人間に安全な未来を約束するものは何一つとして含まれていないのである。いうならば歴史そのものが anarchy であり時間を超越したものなのである。

一方、歴史を造り出す人間は個々人が個有の生命と時間を有するものであり、たとえその生命と時間に限りがあろうとも次々と受け継がれていく連続性へ中に無限性を秘めているのである。従って政治的な流れと人間的な流れとは相並んで流れ、相互に時間的に密接な関係にありながら、決して一つに触合しあうことはないのである。しかし *The Secret Agent* において大衆と政治とを結びつけているものがあるとするならば、それは Mr. Vladimir に見られる “madness and despair” であり、Verloc をはじめとしてその仲間に見られる “vanity”, “meanness”, “worthlessness” である。こうした要因が現実世界の真実を知らない、知ろうとしない、又知らしめようとしない個々人の無知や怠惰と結びついて人間を社会的にも精神的にも孤立した状態に導くものであると考えられる。

無知が人間関係を fragmentation していくものであれば、その逆である knowledge は人間関係における相互理解と協力を生み出すものと考えられるかも知れないが、*The Secret Agent* の世界では knowledge も又分裂と破滅の要因となっているのである。例えば、Winnie が Stevie の

不慮の爆死の真相を知ったことが Verloc の殺害に繋がり、Ossipon が Verloc 家で起った出来事を理解したことが Winnie の死に繋がり、Assistant Commissioner が Chief Inspector Heat の情報源を探り出したことが彼等二人の間に相互理解を生み出すのではなく上司と部下との間に好ましくない関係を生じさせている。しかし knowledge が常にこのような悪い結果を人間世界にもたらすものでないことは万人が認めているところである。従って *The Secret Agent* における knowledge は特殊な情況に置かれた knowledge であるといえるだろう。この *The Secret Agent* の knowledge について Avron Fleshman はその著 *Conrad Politics* において次のように述べている。

Knowledge, which in other circumstances would bring people together, in this world leads to destroy each other when they learn to evils formally veiled. (9)

III

Conclusion

二章において見てきたように Conrad は *The Secret Agent* のもつ分裂した世界を人間の “ignorance”, “idleness”, “vanity”, “meanness”, “worthlessness”, “secret” 等の諸要因を中心に描き上げているのであるが、更に分裂した無秩序な image は登場人物の姓名の不明確さやロンドンの街の番地の不自然さ、Mr. Vladimir の本国の曖昧さ等種々雑多な方面から次第に強められていくのである。このような要因に “knowledge” と “time” とをうまく噛合わせ、積木が崩れるように分裂していった *The Secret Agent* を読み終えた時、我々は実につまらぬ動機や思考から生じた事件の実につまらぬ結果の馬鹿ばかしさに啞然とするのであるが、それが Conrad の狙いでもあった。1923年9月1日に Ambrose J. Barker にあてた手紙の中で Conrad は *The Secret Agent* を書いた動機について ‘My object, apart from the aim of telling a story, was to hold up the worthlessness of certain individuals and baseness of some others.’ と述べているのである。又 *The Secret Agent* の中においては “This joyousness and dispassion of thought before a task of some importance seems to prove that this world of ours is not such a very serious affair after all” と語っている。*The Secret Agent* を読む限り、我々はこの Conrad の意図した分裂した mad で worthless な世界を見るのであるが、それ以外にも見落してはならない問題があると思われる。

それは *Nostromo* や *Under Western Eyes* 等の小説に見られる Conrad の政治に対する癒しがたい不信感である。これは長い年月にわたって政治的に数々の苦汁をなめてきた政治的被害民族とも云える Poland 人の政治に対する真の心情であろうと察せられる。従ってこの Conrad の政治に対する不信感は Poland 人以外の我々や西欧人にはとうてい理解出来ない根の深いものであったと想像されるのである。だからといって *Nostromo* を初めとする所謂彼の政治小説といわれるものに彼独自の政治理念を見出しえないのは彼の政治に対する不信感が原因であるという単純な理由だけでとうてい片付けられるものとは思えない。更に何故 Conrad は政治に対する不信

感を抱き、独自の政治理念を示さずして初期の海を舞台とする小説から離れ、執拗なまでに政治にかかわりあいをもつ小説を書き続けたのだろうか？ そのあたりの関係が今後解明されなければならない問題であると思われる。

BIBLIOGRAPHY

I. PRIMARY SOURCES

- Joseph Conrad, *The Secret Agent* London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1960.
 Avrom Fleishman, *Conrad's Politics*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967.
 R. W. Stallman, *The Art of Joseph Conrad: A Critical Symposium*, Michigan: Michigan State University Press, 1966.
 Douglas Hewitt, *Conrad*. London: Bowes and Bowes Publishers Ltd., 1969.

II. BOOKS

- J. I. M. Stewart, *Joseph Conrad*. London: Lowe and Brydone (Printers) Ltd., 1968.
 A. J. Guerard, *Conrad the novelist*. Cambridge; Massachusetts: Harvard University Press, 1965.
 P. L. Wiley, *Conrad's measure of Man*. New York: Gordian Press, Inc., 1966.
 E. W. Said, *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 1966.
 M. Mudrick, *Conrad. A Collection of Critical Essays*: New Jersey: Prentice Hall, Inc., 1963.

Notes

- 1) Joseph Conrad, *The Secret Agent*. p. 51.
 - 2) *Ibid.*, p. 303.
 - 3) *Ibid.*, p. 305.
 - 4) *Ibid.*, p. 173.
 - 5) R. W. Stallman, *The Art of Joseph Conrad*. p. 234—253.
 - 6) Avrom Fleishman, *Conrad's Politics*. p. 203—212.
 - 7) Conrad, *Op. cit.*, p. 33.
 - 8) *Ibid.*, p. 41.
 - 9) Fleishman, *Op. cit.*, p. 193.
-